

アグネス・妙珠・エンジェエスカ

日本に於いて、浄土真宗は700年の歴史があります。このことは、お釈迦様によって悟られ、親鸞聖人によって改めて受け取られた教えが、多くの人々によって繰り返えされたことなのです。つまり、そのような繰り返しによって大切な教えの文句が、全部ではないにしても、スローガンのようになってしまったということなのです。スローガンは耳障りがよいのですが、それが現実に相応していないと無意味なものになります。

いったいどれだけ多くの人にとって浄土真宗は伝統的な価値をもっているのでしょうか。どれだけ多くの人にとって、浄土真宗は実際の役に立たない毎日の生活と関係のないスローガンとされているのでしょうか。

かってある人が私にこうたずねました：南阿弥陀仏と仏さまは同じであると、おっしゃいますが、そのことを教えてください。私の理解では、例えば実際に燃える火があり、またただ、火と言う言葉があります。火と言う単語は、現実に様々な名前を与えるひとつの言語のなかにあって、それは火そのものではないのです。そこで、仏様の名前がどうして仏様と同じだと言えるのでしょうか。”

それは大変よい質問だとそのときおもいましたが、今でもそうだと思います。“仏様の名前が仏様そのものとどうして同じなのでしょう”という質問です。

言葉が現実に名前を与えることができても、それがの実体ではなく、なんらの活動もおこさないのは、事実です。これは、すべての人間の言葉の働きは人間のころより作られたものであるからです。

ほかの生き物は別の言葉のはたらきをもっています。たとえば、猫の言葉は人間には少しはわかるかもしれませんが、それでも一緒に生活して、感情を別ちあって間接的にわかるでいどです。どんな言葉の働きにも限界があります。人間にとって問題なく自然にわかるというような言葉はありません。人間としては、多少のボディランゲージやジェスチャーを発展させてきました。

人間の心の働きに条件づけられた物事には限界があります。そこで、我々の心の限界は、もしコミュニケーションがうまくできたとしても、誰かを全体的に理解することの障害となるのです。我々はすべて、まず第一に自分自身を好かれたり、守られたりしなければならぬ者と感じているわ

けです。ごく自然に、我々は自分の考えていることやしていることが、少なくとも自分にとって最もよいことであると、信じているわけです。自分の言葉は簡単におぼえられ、自分の家族のしきたりは楽である、などと考えているわけです。

しかし、どの言葉や文化にも何等特別なことはないのです。それらはたんに、教育制度のなかで初めから教えられたことだから、好きだ嫌いだなどと言っているにすぎません。アメリカで生まれた日本人の子供は英語を学ぶのに少しも困難をかんじませんが、彼らは英語で教育をうけ場合、成人してからは、日本語を学ぶのに困難をおぼえることでしょう。

我々の経験と同様の限界をほかにも想像することができます。犬は本が書けませんし、魚は読むことが出来ません。魚が人間の可能性や限界についてわかるかどうかは、疑わしいことです。たぶん、魚は人間のことをそれほどわからないでしょう。

魚の例でもわかるように、われわれには、われわれがほんとうに仏様になるまで、仏様のことはわからないのです。仏様は人間が想像することはできないのです。仏様について、いくらかのかはわかるかもしれませんが、完全にはわからないのです。なぜかと言えば、仏様は、その本性からして無限であるのにたいして、我々人間は有限だからです。

ひとつのいのちから次ぎのいのちへと、ついには人間になるために魚が多くの変身をくりかへすように、迷いのない仏のいのちとなるために無数の変身をくりかえすのです。でも、たとへば、ある魚が幸運にも人間となんらかの縁をもち、精神的にいっしょにくらすようになれば、その魚のいのちの完成の時間は短くなることでしょう。

同様に、人間も仏様とよい因縁をもち、仏様への完成の過程は短縮されるのです。

仏教によれば、人間が仏様となる、つまり、ほんとうに完成されたいのちとなるためには、智恵が必要であると言うのです。私達の限界や不完全なことは、すべて無知、つまり智恵のないこと、実相を如実にさとらないこと、によってひきおこされているのです。そのような智恵は自然にこころと一体になり、事実とならないといけません。このためには智恵は学校で学ぶことはできません。それは、こころによって育てられてゆくものなのです。

だれでも、そのような智恵を育ててゆく可能性があります。しかし、そのためには、特別な条件、因縁がひつようで、そのような因縁を得ることは

まれなことであり、無限の時間のなかでただ一回のことなのです。

阿弥陀仏は、仏になるまえは、一個の人間でしたが、自分と同じ幸せのいのちに人々になってもらおうと言う決心をしたのでした。阿弥陀仏はわれわれに、すみやかに、やさしく仏様になってもらおうと言う道をあたえてくださったのでした。

阿弥陀仏が、このことをなしとげたのは、かって彼は人間であったからでまた人間が仏様になることの困難さを知っていたからです。阿弥陀仏は、このことを大慈悲のためになしとげたのでした。

そこで阿弥陀さまは、完全な智恵として、その智恵がわれわれに働く道を知っておりました。阿弥陀さまは、さまざまの人間が仏になるために、様々な願いを打ち立てました。

仏様は本来、無限の、何物にもとらわれない、どんな形にもとらわれないのですが、われわれとの、ご縁をもつために、ひとつの形をとりました。つまり人々のあいだに、生きている仏性の形として名前（名号）を打ち立てたのでした。人間はどんなに限定されていまして、その名号について語る事ができますし、その名号を称え、仏さまを直接聞くことができるわけです。つまり、われわれは、仏様と語りあうことができるわけです。

このような名号の働きのために、阿弥陀さまは、とほうもないような長いあいだの働きをとうして、力を蓄えたのでした。何故かと言えば、我々が仏様となる時間を、短縮するためには、宇宙的なエネルギーが必要だからです。勿論、われわれには、そんなエネルギーを想像することはできません。そのような仏様の力が名号にこめられているわけです。

仏とは智恵なのです、と同時に力（エネルギー）でもあります。この力はどんな形でもとることができますが、形にとらわれていないために、形にとらわれた我々にはとれえることができないのであります。形とはいつも、限界をもったものです。いかなる形も形のないものを経験することはできませんが、このことを、空（スンヤター）と言うのです。形あるものは、形なきものと語ることはできません。形なきものはあらゆるものに貫通し、包み込んでゆきますが、形あるものは、形ありものは、その限定のために、形なきものを経験することはできないのであります。

このような、形あるものと形なきものが通じあうために、阿弥陀さまは無限の力をその名号にこめたのです。このような力は、われわれに認識することができるのですが、まずは言葉のうえだけのことでしょう。しかし、名号を実践してゆくと、名号を称えることに生きてゆくと、

遅かれ早かれ、名号を感じる能力と、それが日常生活にもたあらず様々な功德（ご利益）が齎されてくるのであります。

名号は、我々に仏様の智慧をもたらしてくれますが、それは、すべてについての、ほんとうの智慧なのです。そうしてゆくと、われわれは、いのちが段々と改善さえって、ひとつひとつ妄想がなくなってゆき、と同時に我々は、様々な悩みからしだいに、離れて行くのです。そして、ついには、我々は、名号のなかの仏様と一体になり、さまさまの業の束縛がなくなってゆくのであります。名号のなかの仏様におあいして、形なきものが、どうして形をとることができるのか、とすることがわかってくるのです。そしてやがては、我々は、いかなる形をもとる必要がなくなるのです。つまり、阿弥陀様とひとつになるわけです。

このようにして、名号は阿弥陀様によって、巧みに作りあげられているものなのです。名号は我々の人生をすごしてゆくのを助け、そして仏さまとなさしめるのです。そういうわけで、名号は人間の知性ではとらえられませんが、名号と称える実践によって経験することができるわけです。これが浄土真宗の教えの要点であります。